

研 修 部 だ よ り

出張報告

第 41 回 視覚障害教育実践研究会

2月24日(土)25日(日)に奈良公園バスターミナルレクチャーホールにて、視覚障害教育実践研究会がありました。以下、参加された大橋先生と南先生からの報告です。

研修内容

24日

◆視機能及び発達レベルからみた生活視覚認知能力

◆新版点字学習指導の手引きのポイント

◆視覚障害乳幼児の運動発達

25日

◆視覚障害教育の現在のトレンド

◆視覚障害教育の教科指導の専門性

特筆すべきこと

◆走、投、跳などの基本運動をする機会に制限のある盲児は、同年齢の幼児の発達に比べてかなり遅れている場合が多い。晴眼児の標準に追いつくためには時間がかかるが、幼児の頃から「歩く、走る、スキップする」などの動姿勢、ラジオ体操、「気をつけ、礼、座位」などの静姿勢、「基本動作訓練プログラム」や「敏捷性を高める運動」などをさせることが大切。

◆「見通しをたてて振り返りをする」経験をくり返すことで経験になっていく。

◆振り返りの時に教師の適切なフィードバックが必要となるが、次第に生徒自身で振り返ることができるようにしていく。

◆特に「見れば分かるもの」についての指導は丁寧に行う。

令和5年度 学部別研修

【幼稚部】

実態把握から始める支援の充実と個に応じた指導

◆成果:実態把握の観点を具体的に押さえたことで、個の視点に偏らず実態を収集することができた。

◆課題等:自立活動の課題を抽出するために、自立活動6区分に即して考察したり、課題を関連付けたりする過程で話し合いが進めにくく、同じ人同士での意見のやりとりになりやすかった。課題の関連付けや考察を進める上でよりわかりやすい工夫が必要である。また、自立活動に関連した知識もより必要である。

【小学部】

子どもの将来を見越した自立活動 ～文化的な生活を送るために～

◆成果:これまでの盲学校での自立活動では、点字指導(単一、重複)、歩行指導においても手で見える力、興味・関心を持つことができる力を幼稚園時代からの早期教育で育むことがとても重要だということが改めてわかった。そのためには、自立活動内容に当てはめて考えることに取り組むことで、誰が見ても指導の基準がわかりやすくなるのではないかとということがわかった。

◆課題等:重複児童生徒への点字指導の取り組みが少ない。何から学習すればよいか等の参考事例が貴重で、児童の成長と共に指導実践を記録して置く必要がある。

【中学部】

「自立活動」の視点をふまえた授業づくり ～視覚障害の理解を基にした実態把握と共有～

◆成果:「自立活動フローチャート」を基に、実態把握の部分で自立活動の6区分に分けたものを活用し、生徒の実態を整理することができた。生徒の実態を、担任・授業担当者・その他の教員で共有し、課題や支援について、様々な教員の視点で意見を出し合うことができた。

◆課題等:次年度の指導目標や内容をたてるところまで進めることは難しかった。主事会と重なっていたため、メンバーが集まりづらいことが複数あった。

【高等部①】

自立活動の視点をもった実態把握と授業づくり

◆成果:昨年度から取り組んでいた視線入力装置 Tobii を用いた視線入力を今年度も取り組んだ。4 枚のカードの中から牛乳の写真を見るとカードを倒すことができ、何回倒すことができるかに取り組んだ。絵柄を変えたり装置の位置を調整したりすると、カードを倒すことはあまりできなかったが、画面を見ている時間が長くなった。

◆課題等:視線入力は意思表示の 1 つの方法なので、他の意思表示の方法を身につける活動に取り組むことが必要であると感じた。そこで次年度は具体物を提示し、本人の選択した物を渡すという活動を取り入れ、自分のしたいことや欲しいものを選択する力を養っていきたい。

【高等部②】

視覚障害児童生徒の学校や生活におけるベース作り

◆成果:今後、準ずる教育課程の児童生徒が減少するが、盲学校として教科学習の専門性を維持していく必要と着眼点等について協議し共有した。

◆課題等:準ずる教育課程が「なくなる」と、盲学校としての、視覚障害教育の専門性が希薄になっていくこと。

【理療専門部】

自立活動の視点をふまえた実態把握と支援

◆成果:自立活動の柱を学ぶ良い機会になった。理療科独自の研修も併せて行うことができ、有意義であった。

◆課題等:自立活動に基づく評価についても学びたい。引き続き、学校全体で設定したテーマに加え、理療科独自の研修も行っていきたい。